

# 「危機の時代」を生きる者の使命

日本社会事業大学学長・東京大学名誉教授  
神野直彦

2020年12月21日

# 1. 明日のために

(1)「危機」とは「岐れ路」のことである。

「破局」か「肯定的解決」かの「岐れ路」が「危機」である。

(2)たとえ明日、この世が終わろうとも、人間は明日のために生きなければならない。

(3)「危機の時代」に生きる者は、明日の社会のヴィジョンを描かなければならない。

ヴィジョンがなければ、危機の痛みには耐えられない。

(4)ヴィジョンの実現を目指して、「岐れ路」で選択を誤らないように、「slow up and calm down」を合言葉に、蛇行速度を維持しながら、危機を乗り越えなければならない。

## 2. 内在的危機と外在的危機

- (1)人間の社会を襲う危機には、「内在的危機」と「外在的危機」がある。
- (2)内在的危機とは、人間の社会が創造主である危機。
- (3)「危機の時代」とは、内在的危機が溢れ出し、人間の社会の枠組みを変えざるをえない時代をいう。
- (4)内在的危機は現実の社会の状況を部分的にせよ否定して、新たな状況を形成して克服することができる。
- (5)外在的危機には人間の社会は適応するしかない。  
しかし、外在的危機は人間の社会の行動原理に大きな影響を与える。  
「分かち合い」か「自分さえよければ」か。
- (6)外在的危機は「危機の時代」の内在的危機を増幅させる。

### 3. 「危機の時代」を襲うパンデミック

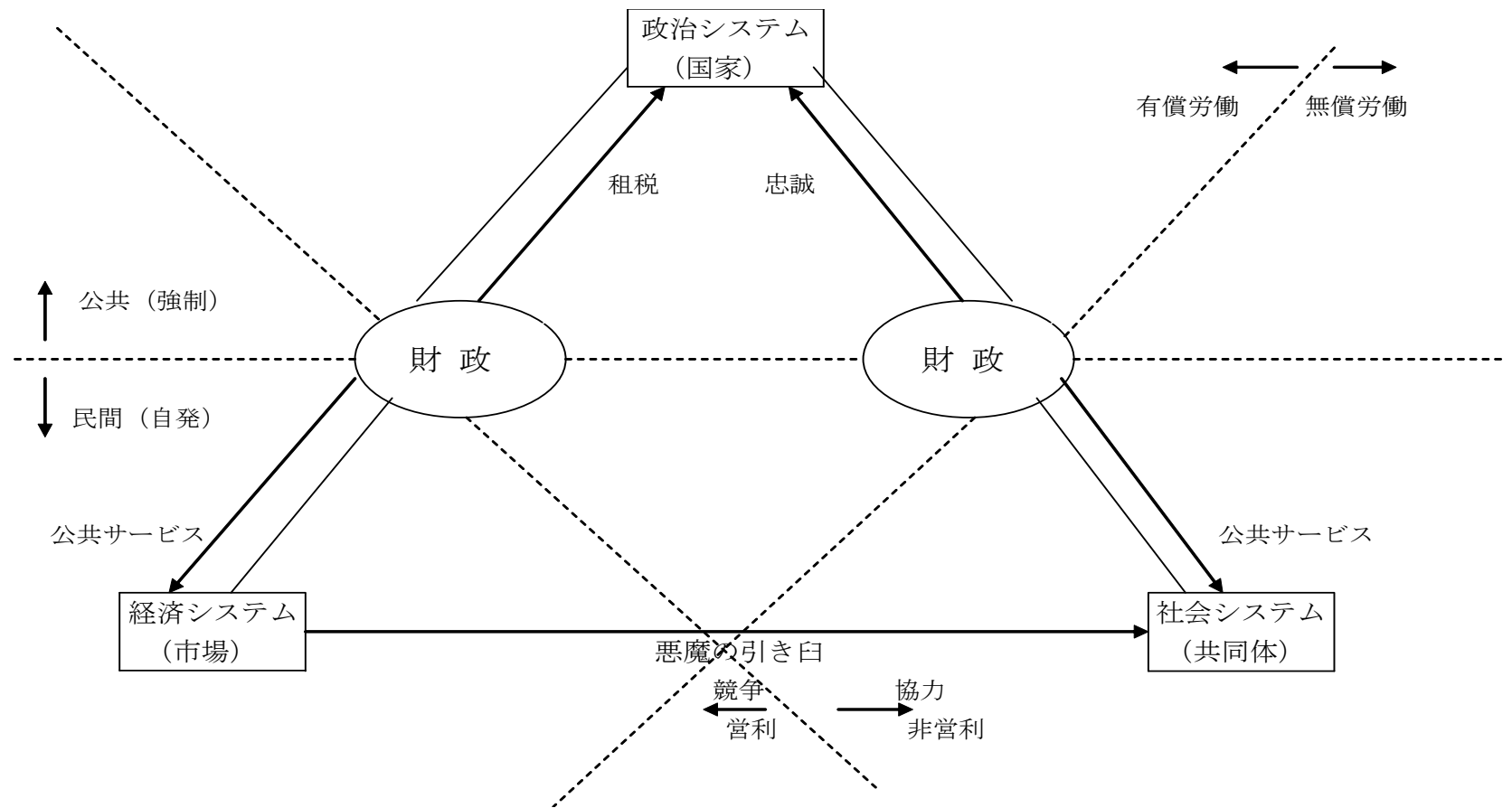
- (1) 農業社会から工業社会への転換期を襲った「黒死病」  
1347年から1353年までに、「黒死病」によって少なくともヨーロッパの人口の3分の1が死亡。  
→「封建時代の全般的危機」
- (2) 軽工業社会から重化学工業への転換期にはスペイン風邪が襲う  
第一次大戦中の1918年から翌年にかけて流行し、死者の数は2500万人と第一次大戦と第二次大戦の死亡者と合計したよりも多い。
- (3) 工業社会からポスト工業社会への移行期に、「コロナ危機」に襲われていることを忘れてはならない。  
「コロナ危機」の克服は、同時にポスト工業社会の形成と結びついている必要がある。

## 4. 「危機の時代」の二つの環境破壊

- (1) 1991年のヨハネ・パウロ2世の「レールム・ノヴァルム」の副題  
宇沢弘文東京大学名誉教授が考えた  
「社会主義の弊害と資本主義の幻想  
(Abuses of Socialism and Illusions of Capitalism)」
- (2) 1891年のレオ13世の「レールム・ノヴァルム」  
「資本主義の弊害と社会主義の幻想  
(Abuses of Capitalism and Illusions of Socialism)」
- (3) 二つの環境破壊  
自己再生力のある自然環境の破壊  
自己再生力のある人的環境の破壊
- (4) 国連の掲げる「持続可能な開発目標(SDGs)」  
自己再生力のある自然環境、自己再生力のある人的環境(人間の社会)が備えている二つの自己再生力を持続可能にする発展の追求。
- (5) 本来、外在的危機である自然環境の変化が、内在的危機になっているところに、現在の「危機の時代」が全般的危機に陥っていることを意味している。

# 5. 「政府縮小—市場拡大 (less state-more market)」戦略から 「市場抑制—市民社会拡大 (less market-more civil society)」 戦略へ

(1) 市場社会では三位一体が三角形となっている。



## (2)社会システムの拡大

- インフォーマル・セクター＝帰属集団としての家族・コミュニティ
- ボランティア・セクター＝自発的に組織された機能集団としての非営利市民組織、共同組合、労働組織など

## (3)生産の主体としての企業の変容

- ・企業にも社会システムの協力原理の浸透⇒SDGs
- ・企業の構成員の生活者としての役割の保障  
→ポスト工業社会における人材確保

# 6. 役割の逸脱—生活者としての主体的活動

(1)ポスト工業社会におけるcommonsの生成。

同質性と非移動性の増大←テレワークなど。

(2)自由時間としての生活時間の拡大。

「4万時間制」—週30時間労働

(3)愛し合い、学び合う連帯意識の再活性化。

(4)再活性化した連帯意識にもとづく社会貢献活動へのコンヴィヴィアルな参加。

(5)オムソーリ(omsorg)とラーゴム(lagom)

「悲しみの分かち合い」としての社会貢献活動とワークとのラーゴム。

社会貢献活動とは人間の社会の共同の困難に、解決者として行動する事。



# 7. 社会貢献としての 「ライフサポートプラットフォーム」づくり

(1) 「悲しみの分かち合い」にもとづく二つの機能

相互扶助

共同作業

(2) 「悲しみの分かち合い」の二類型

① 人間の個人としての機能障害への支援・代替サービス

→ 障害者・高齢者へのケアサービス

② 人間と人間との関係の機能水準への支援・代替サービス

→ 児童福祉 (child welfare)、児童保護 (child protection)、家族政策 (family policy)。

(3) ポスト工業社会への移行にともなって、家族機能の弱体化→脱家族化 (defamiliarization)

政策の展開→家族の関係性への支援・代替という認識が高まる。

(4) 「観客社会」から「参加社会」への転換を支える「ライフサポートプラットフォーム」。

# 8.明日への曙光

(1)「所有(having)欲求」から「存在(being)欲求」へ

①生活水準の上昇から生活様式の充実を求める—「豊かさ」から「幸福」へ  
「飢餓の恐怖」からの解放

②存在欲求＝人と人、人と自然との関係で充足される欲求  
＝幸福の実感

所有欲求＝自然を所有することによって充足される欲求  
＝豊かさの実感

③工業社会＝存在欲求を犠牲にして所有欲求を充足した社会

(2)類的本質を取り戻す「懐かしい未来」